# CEP インタビュープロジェクト 学生達の自己イメージの変化

*The CEP Interview Project – Changing Students' Perceptions*

ハワード・ブラウン*
（訳　小泉　素子）

## 序論

日本人英語学習者は、自信にまつわる問題を抱え込みがちである。自分自身をバイリンガルとして、または英語話者として認識することができず、結果としてやる気を失ってしまう。本研究は、英語教育を専門としない専門課程日本人教授の英語インタビュープロジェクトの調査結果である。撮影されたビデオは、リスニングや討論を中心に学習する英語レッスンで主要教材として使用した。このプロジェクトの目的、方法、結果について、以下記述する。

## モティベーション（やる気）

モティベーション（やる気）には、様々な要因が関与していると思われるが、本研究では、自己効力と社会的に定義された言語に対する自信に焦点をあてる。

自己効力とは、学習者が自分自身の成功レベルを描きながら行動を起こすという考えである。成功できないだろうことを確信する行動については、人はそれほど努力をしないものである。(Dornyei, 1998)。日本人学習者の多くは、言語学習においては、低い自己効力しか持ち合わせていない。多くの学生が、英語を身につけることはできない、英語は身近なものではないと思いながら英語レッスンに参加し、失敗することを考えながら、成功への努力をしようとしない。

英語学習は難しいという考えは、大学での英語レッスンに限ったものではない。言語学習における自信は、社会全体、または学習者が身を置くコミュニティでの文化的な影響を受け、その考えにより定義される（Clement, Dornyei　&　Noels, 1994)。日本社会では、英語は難しく、日本人が英語を身につけることはできないという考えが常識になっているように思える。社会的に定義された言語に対する自信が欠乏しているのだ。結果として、学習者は、１つの言語しか使用できないと信じ込んでいるのだ。「日本人なのだから、英語は話せない」という思い込みは、大学の日本人 EFL 学生の中では珍しいことではない。(Hadley, Jeffrey, Warwick, 2001)。英語は、アメリカ人やイギリス人の言語であって、日本人が使う言語ではないと感じてしまう学習者が多い（Bayne, Usui & Watanabe, 2002)。

ハンガリー人の学習者を研究した Dornyei（2001）は、言語学習のやる気を損なういくつかの要因を発見した。これらの要因には、現在、または過去の教師との嫌な思い出、不十分な教育施設や教材、自信のなさ、L2（学習している外国語）や L2 文化への否定的な考えやグループ内の他メンバーの態度、必須教科として言語学習を受けなければならないといった状況などが含まれていたが、それぞれの要因には、影響を及ぼす大きさの差異は見受けられなかった。一方、Falout と Maruyama (2004) は、日本人英語学習者を対象としてこれと同様の研究を行い、自信のなさ、英語そのものに対する否定的な考えが日本の大学における EFL レッスンのやる気のなさにつながる２つの最大要因であることを発見した。

*Howard Brown［情報文化学科］

## 学生の自己イメージを変えさせるには

学生自身が自分は日本語しか話せず、英語を身につけることができないと思い込み、英語学習は難しいものというイメージを持っていることが効果的な英語学習の妨げになっていることは明らかであろう。彼らが持っている、こういったイメージをどのように変えることができるだろうか。

彼らの今現在持っているイメージを変えるための方法の１つは、ロールモデル（模範となる理想像）を提示することである（Murphey, 1998）。自分と同じ環境に育った、英語を母国語としない話者が自信をもって問題なく英語を使いこなしている姿を見ることで、英語に対する前向きなイメージを持つきっかけになる可能性が高い（McKay, 2002）。ロールモデルが必要なのだ。この仮説を日本の状況に当てはめて考えると、原稿や予行演習なく、言いたいことを確実に英語で伝えることができる日本人英語話者と英語学習者が接するような機会を作ることが必要である。

## 現在のロールモデル

一方、今日、日本で英語を学習する人達にとってのよい言語ロールモデルの存在はほとんど認められない。学生達にとって、英語を母国語とする、しないにかかわらず、学外で英語を使いこなしている人たちと直接接するような機会はほとんどない。ポップカルチャ（大衆文化）の中に、英語を使いこなしている人の存在を探すことは難しい。例えば、テレビドラマでは、登場人物の恥ずかしい経験として、英語での会話のやりとりを取り上げられることが多い。英語学習での失敗は、生活の一部として、ときには微笑ましい行動として描かれることも少なくない。英語教育番組でさえ、最初に、学習者が間違った英語を使うところを見せてから、日本人の英語教師やネイティブが間違いを正したりする。

その一方で、状況は変りつつある。日本人英語教師は、言語教師としてのみでなく、よき英語話者の代表としての認知度が高まりつつある（Miyazato,2007）。ポップカルチャにおいても、外国語能力を持つ日本人が登場してきている。教育番組でも同様に、英語を使いこなせる日本人が、これまでのように何ができないかを話すのではなく、英語を使って何ができるのかを披露する機会がより多くなってきている。NHK の「英語でしゃべらナイト」は、１つのよい例で、毎回、自信をもって、英語を使いこなしている日本人成功者を紹介している。

## 専門課程日本人教授―その可能性

日本人英語教師がよき英語話者の代表というロールモデルの役割を果たす一方、学習者にとっては、英語教育にすべてをうちこんでいるわけではなく、英語を専門としないロールモデルの存在も大切である。本研究では、学生達のやる気を喚起するためには、英語を専門としている人のロールモデルではなく、英語を使って仕事や日常の生活をしているロールモデルの提示が大切であることを提案している。ロールモデルは、学生達と類似した経験や背景、環境を持つ人が適しており、大学という環境では、専門課程日本人教授がロールモデルとして最適な人材だと思われる。

たいていの日本人教授は、高い英語能力を持ち、学生達と同様に、学生時代には、大学での英語授業を経験している。しかも、学生社会において、尊敬され、かつ身近な存在でもある。これら３つの要因を持ち合わせる専門課程日本人教授は、英語話者としての完璧なロールモデルだと思われる。

## ビデオプロジェクト

専科教授は、英語話者としての完璧なロールモデルである。ゲストスピーカーとして、言語学習者

の助言者として専科教授がレッスンに参加することは大変意味があることなのだが、現実的には、専科教授が単純に多忙を極めているという理由で、本人からのレッスン参加は、不定期にしか行うことができない。しかしながら、専科教授のインタビューをビデオ撮影すれば、言語レッスンで必要なときにいつでもそのビデオを使うことが可能となる。

このプロジェクトでは、新潟国際情報大学の９名の教授（日本人７名と韓国人、ロシア人各１名）のインタビューをビデオ撮影した。英語授業でとりあげられる様々なトピック（題材）について、専門家としての意見を求めるのではなく、知識人としての彼らの見識を聞いた。撮影されたビデオ映像は、レッスンで使用するDVDに編集し、コミュニケーションのための英語プログラム（Hadley, Jeffrey & Warwick（2002））アドバンスレッスンのヒアリングや討論教材として使用した。

インタビュービデオは、５日間１サイクルのレッスンの一部に使用した。学生達は、１つのテーマについて、１回90分のレッスン４回で、読解、新単語の確認、討論を行い、５回目のレッスンで、テーマについてのまとめや最初の４回のレッスンでの考えをひろげるためにビデオを使用した。

ビデオデイは、決められた流れにそって行われた。一般的なリスニングレッスンでは、トピックに関する導入討論からレッスンは始まり、その後、インタビュービデオを３回視聴した。１回目の視聴後に、学生達は、内容に関する一般的な理解度を確認する質問に回答し、２回目の視聴後に、より細かな内容に関する質問に回答した。新単語の確認のために３回目の視聴を行い、教師の判断によりインタビュー回答者のコメント概要の字幕入りバージョンを更に使用することも可能。ビデオ視聴とそれぞれのアクティビティが終わったところで、学生達は、一番初めの導入討論に戻り、ビデオの映像を見て思ったことを考えながら、もう一度討論を行った。

## 問題点

CEPインタビュープロジェクトの準備や導入には、いくつか問題点があった。最初の問題は、インタビューに協力してくれる教授陣の募集であった。教授陣は、恒常的に多忙を極めており、また自身の専門分野以外のプロジェクトへの参加には、あまり積極的でないことが予測された。彼ら自身、自分の英語能力は、完璧ではなく、学生に聞かせるようなものではないと思っていることも、プロジェクト参加にあまり乗り気でない理由の１つになると思われた。こういった問題については、現在、またこれまでのCEP教師により築きあげられてきた教師同士の良好な関係により解決することができた。多くの専科教授は、過去にゲストスピーカーとして英語レッスンに参加した経験があり、CEPプログラムについてとてもよいイメージを持っていたのだ。大学の規模が小さいこと、教師同士が仲の良い学部という環境もあり、インタビュー協力者の募集は、それほど難しいものではなかった。

このプロジェクトのためのカリキュラム計画も１つの問題だった。教授陣のインタビュー、ビデオ編集、DVD作成と準備には時間がかかった。ビデオインタビューの内容が、他のレッスン内容にうまくかみ合うように、授業内容や教授法については、事前に十分に検討されている必要があった。初めてのレッスンが始まる３ヶ月前には、注意深く、また十分にレッスンの準備が整えられ、インタビューの内容がレッスン内容にかみ合うように配慮した。

ビデオインタビューは、学生達にとっては、リスニング力を試される難しい教材であった。まず音質の問題。ビデオ撮影は、家庭用ビデオ機器を用い、素人が録音作業を行ったため、いつも品質のよい音声で録音されているわけではなかったからだ。また、インタビュー回答者は、事前に自然なスピードで話すよう依頼されており、原稿もなければ、学生に聞きやすいような簡単な英語で話すといったこともなかったので、彼らの英語が、口ごもりやつなぎ語、繰り返しなどの表現も含め、よりリアル

な英語になったこともある。最後は、インタビュー回答者が使用する言葉の難しさだった。インタビュー回答者が、通常学生達が慣れている言語レベルよりも高いレベルで話しをすることが多かったからだ。教師という仕事柄、普段からこまかな内容や深い内容について話をしがちなことも理由の1つだった。こういった理由から学生にとってインタビュービデオは、とてもレベルの高い難しいものとなったので、ビデオとともに使用する教材の準備にも苦労した。

上記の問題点は、いくつかの方法によって解決できた。まず、ビデオデイは、それぞれのトピックについてのレッスン最終日に行うようにした。これにより、学生は、ビデオ視聴前に、関連するいろいろな考えについて学習し、理解する時間を与えられた。また、教師にとっては、ビデオで使われた新しい単語や表現をレッスン中のアクティビティに取り入れることで、少なくとも学生がビデオ視聴前にそれらの単語や表現にある程度の理解をしているよう配慮することができた。学生がよりビデオを理解しやすいようにするために、レッスンで使用する教材の準備も重要だった。教材は、ビデオ中に使用される大切な単語を使用し作成され、討論で、学生のトピックへのより深い理解を促すための質問を用意した。そして、最後にビデオをよりわかりやすいものにするために、字幕をつけた。DVDは、2種類作成し、1枚は字幕なし、もう1枚はインタビュー回答者のコメント要約を字幕で入れた。字幕入りのDVDは、学生の理解度の確認や、より深い理解を促すために使用された。

## 結果―教師の反応

このプロジェクトの初年度には、4名の教師がレッスンでインタビュービデオを使用した。うち2名は、1,2回しかレッスンで使用しなかったのに対し、他の2名は、レッスンの主な教材として頻繁にビデオを使用した。

結果、教師4名全員がビデオ教材の使用についてポジティブな反応を示した。ビデオ教材の使用回数が少なかった教師2名からは、学生の熱心な態度について、またビデオ教材の使用により、レッスンのトピックをより深く理解することに役立ったとの報告があった。

また、ビデオを多用した教師2名からもポジティブな報告があった。両者とも、ビデオデイはコースの最大の目玉だったと報告している。また、ビデオインタビューをコースにかみ合った内容にするためには、十分な準備期間やチームティーチングが必要で、その結果、職場環境がよりよいものとなり、よいレッスンができたという報告もあった。これほど様々な専門分野を持つ教授陣が1つの教材作成に参加することは、とても珍しいケースであり、大学コミュニティの一員という気持ちをより強くしたという意見もあった。教師達は、学生の英語学習のために、このDVDプロジェクトを大学全体が一丸となって取り組めたことに大いに満足した。

## 結果―インタビュー回答者の反応

プロジェクトに協力してくれたインタビュー回答者達には、ビデオ撮影前、またその直後、このビデオについて同様の思いがあったようだ。なんとなくばつが悪く、自分達の英語は、学生への手本になるには、レベルが低すぎるのではないかと心配していたようだ。しかしながら、実際にビデオを使ったレッスンが始まると、その思いには変化が見られた。参加者のほとんどが、このプロジェクトに参加したことを喜んでいた。学生がこのビデオから何かを学んでもらえるならば、結果として満足だと立ち話で話してくれた教授もいた。また、ビデオを使ったレッスンがどんな風にすすんでいるかと興味をもつ教授も多かった。ほぼ全員のインタビュー回答者から、本当にビデオをレッスンで使用しているのか、また学生達はどんな風に反応したかといった質問をしばしば受けた。このような交流を通

し、専科教授陣と英語教師がよりよい関係を築きあげ、協力やコミュニティの意味を実感できたことは、このプロジェクトの副産物と言える。

## 結果―学生の反応

ビデオインタビューに対する学生達の反応は、レッスン中の学生達の反応観察や期末に行われた学生へのインタビューから計り知ることができた。

レッスン中の学生達の反応は、きまって大変ポジティブなものだったと言っても過言ではない。学生達は、教材への興味を示し、自分の担当教授が英語でどんなことを話すのかわくわくして聞いていた。通常のレッスン教材よりもビデオデイの教材に対し、より集中し、興味を示した。インタビューが学生達の興味を刺激し、トピックについての探究心をあおり、彼らの担当教授の発言が学生自身の意見と合致する部分、しない部分を確認することも大変興味深かったようだ。また、それぞれの回答者同士の意見の違いや類似点についても発言があった。

学生達は、インタビューに回答した教授達がうまく英語を使いこなしている点に大変感動していた。教授が英語を話せることを知らなかったと言う学生も多くいた。教授の英語を聞き、自分の英語をもっと上達させなければと感じた一方、めざすべきことが分かり、達成できるような気がすると発言した学生も何名かいた。

レッスン中の学生観察から、特にプロジェクトの成功を実感できたことが３点あり、その１つは、学期中に行われた初めてのテスト日のことだった。ほとんどの学生がテスト中にビデオ視聴で得た考えについて話をした。テスト中の「〇〇先生がビデオで言っていたように、私は××だと思います。」という学生の回答を聞きながら、教師達は、喜びを感じた。学期中、学生達のこういったコメントをしばしば聞いた。２つ目は、レッスン以外でもDVDの視聴を希望する学生がいたことだ。復習のため、DVDを自宅で見たいというのだ。希望にこたえるため、図書館にある自習コーナーにDVDのコピーを設置した。最後の３つ目の驚きは、２学期に起こった。前学期から引き続きレッスンを選択している学生が、はじめてこのクラスを受講するクラスメートに対し、今学期もぜひインタビュービデオを使って勉強したいと、教師が頼んだわけでもないのに、ビデオレッスンの紹介をしている姿をみたのだ。

唯一、レッスン中にネガティブに感じたことは、リスニングレベルが学生達にとっては高すぎたということだろう。音質やインタビュー回答内容の深さにも原因があった。事前から予測していた問題でもあり、コース開始直後の学生達の様子からも分かっていたので、先の「問題点」の項目で述べたとおり、ビデオを理解しやすいように教材に工夫を凝らした。

１学期インタビュービデオを使用した後に、学生達へのレッスンに関するインタビューを実施した。その際の学生達からのコメントを掲載する。(順不同)

- 自分の担当教授達が、英語教師でもないのに、英語を話せることに驚き、感動した。英語を話せることは知っていたが、専門分野以外のトピックについて、流暢に英語を使いこなしていることに驚いた。
- 自分の担当教授がいつビデオに登場するのか興味があった。セミナーや他のレッスンでは、話すことがないようなトピックについて、担当教授の意見を聞くよい機会でもあった。
- 身近な教授のインタビューをより集中して聞くように心がけた。
- １人の教授だけのインタビューを聞くよりも何名かのインタビューを聞くことで、自分自身のト

ピックに対する考えをより深く追求でき、教授間の回答の違いや類似点を考えることで、自分自身の考えをより明確にまとめることができた。

- インタビューによっては、理解するのが難しいものもあったが、インタビュー回答者の英語というよりは、話されているトピックによる問題だった。
- 教授達のコメントは、専門用語を使用したり、深い話題になったため、ときに理解が難しいこともあった。
- ビデオ視聴は、レッスンのトピックのよりよい理解を促進し、自分の考えをまとめることにも役立った。一方、ビデオデイ前の4レッスンで同一のトピックについて学習することで、インタビュー内容をよりよく理解できた。
- 身近な教授のビデオインタビューは、他のどんな教材よりも意味深いものであった。自分たちのためだけに作成された教材は大変すばらしいものだった。この英語レッスンは、他のどんなところでも受けることができないオリジナルのレッスンだった。
- 当日のレッスンがビデオデイであると知るとクラスが大変活気づいた。
- 字幕付DVDは、インタビューされた教授のコメントの理解度の確認や、新しい単語や文法構造についての理解を深めるために大変役立った。字幕付DVDは、ビデオデイレッスンの大事な一教材であった。字幕付DVDだけではなく、字幕のないDVDをはじめに視聴できてよかった。
- ビデオデイの後には、クラスメートやそれ以外の人たちとインタビュートピックについて、ひきつづき話をしたかったが、言いたいことを十分に話すには、いつもレッスン時間が短すぎるように感じた。
- コースのはじまったばかりには、英語で質問に回答したり、自分の意見を発言したりするのは緊張し、少しおじけづいてしまっていたが、ビデオ視聴後は、担当教授ができるのだから、自分達にもできるはず、と英語で話すことに対する恐れが和らいだ。
- ビデオのインタビュートピックについて、担当教授と英語で話しをしてみようと思ったが、結局恥ずかしさに、思っただけで終わった。
- ビデオデイは、今後もひきつづき行われるべきだ。

このプロジェクトの目的について尋ねたところ、学生全員が「ビデオは、彼らへのロールモデルの提示であり、よい英語の例だ」と正確に回答した。また、彼らの、身近で尊敬する日本人が英語を話す姿を見ることで、英語を身近に感じるようになったとも回答した。

## 将来の展望

このプロジェクトの今後の行方は明らかである。学生達のビデオに対する反応は、予想を上回るポジティブなもので、今後もビデオプロジェクトは継続していかなければならない。また、このプロジェクトを発展させていくことも必要だ。学生達のコメントにあるとおり、彼らの担当教授のビデオであれば、より興味をもって、集中して授業を受けることができることから、できるだけ多くの学生達のやる気を喚起するためにも、もっとたくさんの教授陣からの協力が必要となる。それによって、授業で取扱うトピックもよりバラエティにとんだものとすることが可能になる。

学生達自身からもおもしろい提案があった。ある学生は、次のビデオ撮影からは、学生がインタビューやビデオ編集をしてはどうかという提案があった。また別の学生は、レッスンを受講した当該年度の学生のインタビューを実施し、翌年の学生に見せたらどうかという提案もあった。これを実現

するためには、かなりの作業量が発生するが、日本の大学生活の中での先輩、後輩の関係の重要性を考えると、やるだけの価値はあるかもしれない。また、ビデオではなく、印刷物を使ったらどうかという提案もあった。インタビューの代わりに、トピックにそった英語の小論文を教授陣に書いてもらい、学生達は、それを読解することになる。いずれの提案にもそれぞれメリットがあり、今後検討が必要とされる。

## 結論

CEP インタビュープロジェクトは、大成功をおさめることができたと言える。CEP 教師をはじめ、インタビューに協力して頂いた専科教授陣、学生達からのプロジェクトへの反応は、みなポジティブなものであった。CEP プログラムのインタビュー DVD 教材を使用したレッスンは、今後も継続して行われる、新潟国際情報大学のユニークな言語教育プログラムとなった。

## References


Bayne, K., Usui, Y., Watanabe, A. (2002) World Englishes and self-images of Japanese. In T. Newfields, K. Kikuchi & K. Asakawa (Eds.), *Proceedings and Supplement for the First Peace as a Global Language Conference.* Tokyo.

Clement, R., Gardner, R. C. & Noels, K. A. (1994). Motivation , self-confidence, and group cohesion in the foreign language classroom. *Language Learning,* 44, 417-48.

Dornyei, Z. (1998). Motivaton in second and foreign language learning. *Language Teaching,* 31, 117-135.

Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and Researching Motivation.* Harlow, England: Pearson Education.

Falout, J. & Maruyama, M. (2004). A Comparative Study of Proficiency and Learner Demotivation. *The Language Teacher, 28*(8), 3-9.

HADLEY, G., JEFFREY, D. & WARWICK, M. (2002). 'A Sign of Things to Come: Introducing the Communicative English Program', *Niigata University of International and Information Studies Journal of Research,* 5, pp. 1-21.

HADLEY, G. (2006). 'Challenges to Innovation in Japanese Tertiary Educational Institutions: The Case of Advanced CEP', *Niigata University of International and Information Studies Journal of Research,* 9, pp. 29-44.

Hall & A. Hewings (Eds.) *Innovation in Language teaching* London: Routledge.

Kowalski, K. (2002) Welcome to the club: helping to foster a positive self image in English learners. In T. Newfields, K. Kikuchi & K. Asakawa (Eds.), *Proceedings and Supplement for the First Peace as a Global Language Conference.* Tokyo.

McKay, S. L. (2002). *Teaching English as an international language, Rethinking goals and approaches.* Oxford: OUP.

Miyazato, K. (2007). Investigating present realities of non-native English teachers in Japan: From the perspectives of NS-NNS issues, *The Language Teacher,* 31(6), 15-19.

Murphey, T. (1998). Motivating with near peer role models. In Vigatis, B. (Ed.) *On JALT97: Trends & Transitions.* (pp. 201-205). Tokyo: JALT.